■修了論文

市民学芸員修了論文要旨

伊達市噴火湾文化研究所は、市民の皆さんが持っている能力を文化行政やまちづくりに活かすべく、市民学芸員制度という独自の資格認定制度を実施しています。ここでは、これまでに認定を受けた市民学芸員の修了論文要旨を掲載します。

虚説［南部藩士による室蘭南部陣屋の焼棄と撤退］を検証する

小田島　洋

室蘭南部陣屋終焉についての通説は、

①「戊辰戦争の拡大で、南部藩は新政府軍と抗戦」

②「明治元年7月から、南部藩の守護兵は箱館元陣屋を焼き払い、台場の大砲を破却して退去」

③「これに応じて8月12日、モロラン出張陣屋でも鈴木十蔵ら藩兵約100人が陣屋に火を放った」

④「役目を終えた南部藩兵たちは、ようやく懐かしい故郷へ帰還した」（『広報むろらん2004.7』など）

と、いわれている。

この通説を検証するため「室蘭南部陣屋研究のあゆみ」等を作成し、通説成立の過程を明らかにするとともに、上山守古『日記抜書十四・十五』（盛岡市中央公民館蔵）によって、

③室蘭南部陣屋は慶応4年6月22日、箱館裁判所の許可を得て廃止、守備兵は順次箱館元陣屋に引揚げた。

だから、陣屋を焼却する必要はなかった。

①南部藩は7月13日秋田藩攻撃を決し、8月9日戦闘状態に入った。これで新政府と敵対関係になった。

②その結果、8月12日未明、箱館元陣屋守備兵は元陣屋や弁天台場に放火し、南部藩領地野辺地に引揚げた。

④14日から、藩兵の再編成が行われ、風雲隊は箱館引揚げ部隊で編成され、上山守古（北地留守居表目付『日記抜書』の著者）が隊長を勤め、野辺地口に配置された、という成果を得た。［通説］は主観的願望に基づく［虚説］であることを立証した。

胆振線の誕生から廃止までを振り返って

小西　京子

今から６９年前、伊達ー倶知安間を蒸気機関車が、産物である鉱物資源、農産物、そして住民の移動手段として、その時代でも珍しい客貨車を牽いて走っていた。やがて蒸気機関車から気動車に変わり、札幌ー倶知安ー伊達ー札幌と循環列車が走っていたことを知っている人は少ないと思う。先人が困難を乗り越え開墾し、発展していく中で住民や町内外の有志たちが胆振線とどのように関わり、どのように発展して、その行方がどうなったかという過程を調べ、それを多くの人へ伝え、知ってもらうことが目的である。

北海道の鉄道は明治１３年の小樽ー札幌間の開通から始まり、明治３７年：函館線、大正８年：倶知安ー京極間、大正１４年：輪西ー伊達紋別間、昭和１６年：胆振線（私鉄）と次々に北海道を列車が走るようになっていった。

胆振線は伊達ー倶知安間をつなぐ路線であり、昭和１６年に胆振循環鉄道と胆振鉄道が合併し、昭和１９年に国鉄に移管された。時代と共に、蒸気機関車から、気動車になり、札幌ー倶知安ー伊達ー札幌に準急行列車“いぶり”や、スキー列車が走り、温泉などへと市民を楽しませてくれたのである。

このように胆振線の変遷を詳しく見ていくと、地域の産業構造の変化と住民生活の変化を色濃く反映している路線であることが見出せた。なお、本論文では、文章だけではなく、元国鉄職員の父が保管していた写真資料を用いて、現在の状態との対比を行った。

亘理伊達家に残る『追善和歌』についての調査

伊達　君代

平成18年伊達市大雄寺に残る「伊達成実公250回忌追善和歌」を解読して展示する機会を得た。明治28年大雄寺での法要に奉納された250首の和歌には、亘理伊達家始祖成実公の功勲や主従関係の強さが表現されていた。私は、この事をきっかけに、亘理伊達家文書（伊達市開拓記念館所蔵）に残る追善和歌の調査と解読に取り組んだ。その結果17点の追善和歌、その他関連資料6点の存在が判明した。今回は「貞操院殿（保子様）・後大雄寺殿（邦成公）一周忌追善和歌」（明治38年）の詠者に焦点をあて、当時の人々の繋がりについて、一考察を試みたいと思った。

調査の結果、追善和歌の定義づけは確定できなかった。しかし、日本人は古来より、日常の自然な感情の表出を和歌に詠じた。故人の葬祭も重要な儀礼となり、仏教の渡来と共に法会が詠歌の機会となっていることが分かった。江戸時代の仙台藩においても、回忌法会に追善和歌を詠じ、奉納する慣習が存在した。この事を裏付ける資料として、「久山天昌大居士（成実公）百回忌追善和歌」、「政宗公百回忌勧進和歌」、「登米伊達家天山公三十三回忌追善和歌」等をあげることができる。「貞操院殿・後大雄寺殿一周忌追善和歌」は、和歌（179首）俳句（８句）漢詩から構成され151名の作者により詠まれていた。このうち、110名ほどの人物を特定することができた。親族、旧家臣のほかは、宮城県在住の歌人、歌を良くする人達によって詠まれており、この事から藩政時代の人々の繋がりが依然強固であったことが解った。

今後、他の「追善和歌」についても随時調査解読を試みたいと考えている。

伊達市開拓記念館の合わせ貝と貝桶について

渡邉　久美子

合わせ貝と貝桶の調査は①来館者により深い理解と関心を持ってもらえること②調査結果を踏まえ文化財を次世代に引き継いでゆくことの両方の意味があると考える。調査目標は一般的な貝合わせの歴史・遊び方・貝桶の役割などと共に、実際の合わせ貝の数・絵柄また貝桶の年代や誰の婚礼道具かという点に重きを置いた。

調査方法は貝を大小に分けることから始めた。次に小さい貝の絵柄を人物・鳥・草花に分け、人物は二人と三人に分類、更に蝶番の色で仕分けした。鳥は二羽の飛び方と蝶番の色、草花は蝶番の色によって分類した。その後、左右に分け一つ一つ合わせていく方法をとった。小さい貝で組になった物は319組あり、左右の絵柄は全く同じであることが判明した。組にならない小さい貝は地貝25個、出貝11個であった。大きい貝は地貝のみ26個であった。同じ絵柄の貝は一つとなく、着物の色、冠の形などにより必ずどこかが異なっていた。また大小の貝は作域、大きさから別のセットであることを示している。

貝桶は近世に入り重要な婚礼道具となるが、江戸後期には「黒地・家紋ちらし」へと移行してゆくため（高橋2000）、当館の貝桶は正に江戸後期の特色を呈している。また三つ葉葵の家紋であることから紀州徳川家鍔姫か水戸徳川家八代姫の婚礼道具であろう。仙台藩の佑姫が亘理に嫁ぐ際持参されたと考えると、時代的にも紀州徳川家鍔姫の婚礼道具である可能性が高いことが示される。